

村上春樹「かいつぶり」(第2回)

岡部・佐野・渡辺・楯谷・奈原・大藤・田中・本田

■第一回討論の概要

佐野「答えのないものを探求していく」ドアを言葉で開けようとする「合言葉」違った言葉でも通ってしまう「そこから新しい世界が開けてしまう」

楯谷「心を探求」夢の中で地下室、トンネルを抜ける「門番がいる」無意識を通り抜けていく。最後の章が謎、嘘から出た誠、雇ってもらえるかどうかは分からない、繋がっているか、繋がっていないかもわからない。

渡辺「ストーリーは門番と主人公の掛け合いがコントのような面白さ」

大藤「門番の立ち位置」上の人に言われているから駄目、相手「通してくれと押し切る」

二人の会話「問題と答えがずれていく」「トントント」

奈原「現実的にはとてもいやな仕事探し」食っていくためには合言葉「悪い意味での」ミニミニケーション(場所の論理に従い、空気を読む必要がある)

形而上学的…、死について考えた「シニールな人生

楯谷「主人公の男の自分だけの内面的表現。異質なものの対面、関係を問題」しない。

佐野「読みやすい小説」自分自身の関心を投影しやすい「一度「わからなくなる」とが必要

渡辺「会話の中で話の次元がずれていく」

大藤「違う世界同士がぶつかって少しずつずれていく」

本田「自分の内面にもぐっていくのは共感。自分の選んだように世界が成り立っていく話。」

楯谷「言葉でむりやり開けようとするが、合言葉を知らなくとも開いてしまふ。合言葉と同じようなやつが奥にいた。

なぜ門番は取り次いだのか、なぜこんな格好で出て来るのか、夢で出て来るから「ソリアル。夢と現実が深い所で呼応。」

佐野「言葉しかないのだが、それでまた次の世界でも課題にぶつかる、その連続だ。」

奈原「出口の分からなくなる夢。そうこうするうちに目が覚める。答えがあるとか夢と現実が一致することがない。

楯谷「答えを手に入れてみたら予想とは全く違う答え。奥にかいつぶりがいる。「瓢箪から駒」。後にならなければ、「駒」かどうかも分からない。」

本田「T字路でコインを投げて決める。どっちに行っても人生は同じところにたどり着く。」

大藤「主人公が世界を壊していく話。システムがこれが答えだと言っているものを主人公が壊していく。答えが無効化される。出口でない出口を作る。疲れると感じる。」

佐野「常にこの門番はいる。それは違つて言ひつゝ」

1、あらすじ

僕は就職のための会社訪問に向くが、長い地下道を通つてたどり着いた会社のドアから現われた門番の青年に合言葉を要求される。合言葉を知らない僕は何とかそれを聞き出そうとし、彼が漏らしたヒントから「かいつぶり」という言葉をこじつけ、それが正しい合言葉であると強弁して上役に取り次ぐことを要求する。作品の最終段落では、上役自身が「かいつぶり」として登場し、彼と青年との会話から彼が僕の来訪を上役に取り次いだことが分かる。この最後の場面はどういうことを表しているのか？

この場面から、「合言葉」とは何か、「会社に就職する」とはどういうことか等の問題が複合的凝縮されていると感じる。

2、討論の柱

「最後の場面」について考えるか？

①それまでが「僕」の一人称の語りであるのに対し、最後の場面では語り手が交代し三人称視点(作者)になる。

②場所は、門番が取り次ぐ相手である「上役」の部屋であり、その上役自身が「かいつぶり」の登場人物。

・「門番」は「上役」の関係をどう見るか？

・「就職」会社「上役」とは何か？

・「異界(夢)としての地下世界」とは？

③「かいつぶり」とは、僕が勝手「こじつけた」だらめな合言葉であり、本来それでは開かないはずのドアが開く。

・「言葉」で「扉を開く」はどのように開くか？

・「言葉」で「扉を開く」は「井の中の蛙」の関係か？

田中:何を言おうとしているのか分からないが、夢の中の出来事のような印象。現実の中では、差し迫った要求がある。それに立ちはだかるもの。両者の関係を夢の世界でこじられている。扉があいたかどうかまだわからない。

■第二回討論の記録

佐野・最後の場面の語り手は**全能視点**。合言葉「かいつぶり」？

楯谷・一応取り次いだが、めんどくさいからとりあえず合言葉を言ったというていにしておいただけかも知れない。門番は自分の上役が「かいつぶり」であることを知っている（声を聴いている）？

大藤・教員採用試験の面接の練習で、あなたの言うことは教育つぼくなくて、悪目立ちしてしまう。合言葉とはまさに合格するための言葉。何が合言葉かわからないがそれを考えて、扉を開けて。それらしい言葉を言っていたら、気づいたら本当にかいつぶりがいた。

田中・手乗りかいつぶりの独白⇒煩わしい出来事⇒僕のおかれています状況とそれほど変わらない⇒そこに入って行くために合言葉が必要⇒僕は仕事を求めて合言葉をこじつけるが、そこに待っている者はあまり変わらない状況

佐野・かいつぶりは僕と同一人物？⇒変身⇒抱えている問題がよく似ている

田中・自分もそう思う⇒寅さんの夢⇒面接場所に行くのは今の状況を抜け出したいという欲求⇒扉をこじ開けた向こうにある状況は今の僕の状況と違わない。幾ら求めてもそう掴めるものではない。

楯谷・「5分遅刻」したのは誰か？ どういう意味で僕とかいつぶりが同じなのか？ それなら、門番も僕？ 門番が首になり、僕がその後を継ぐ。そのうち僕も同じことの繰り返しで首になる。

佐野・かいつぶり⇒「将来の僕」がそこにいるともいえる
大藤・「手乗りかいつぶり」は年取った「僕」のあだ名か（出世しても同じか？）と最初考えた。「生前葬」。

佐野・かいつぶり⇒「死について考えるところ」が僕と違う。

奈原・絶対無⇒絶対にわからない⇒この世のルールをみんな決めて、絶対無の中に拡散してしまわないようにルールで守る。夢と現実。そういう実例が積み重なるのが人生ではないか。「5分遅刻」⇒象徴的⇒時間はなかなか捉えにくい⇒今が不断に連続して、掴んだと思ったら過去に逃げていく⇒それだけに時間厳守が世俗のルールとなっている。合言葉⇒捉えにくい時間を固定して生きていくための世俗のルール（かいつぶりという訳の分からぬ言葉で表現するしかない）この世とあの世の構造があって、そのバリエーションが表現されているような気がする。時間論画そこを説明するのに便利なのではないか。

佐野・5分遅刻⇒
田中・5分遅刻⇒ここへ来たのに何分かかったか⇒面接者に合言葉が知らされていたかどうかわからない⇒そこへたどり着こうとする時間をどれだけ費やすか⇒言葉を探すのに右往左往する⇒かいつぶりはその時間を問題にしてい

るのかもしれない？ それが試験の中身だったかもしれない。

佐野・すべて形であるこの社会の決まりを脱却する試みということか？

田中・僕の試みに意義を見出している。

佐野・しかし、その結果がこの結末であるのはどうか？

岡部・同じ時間の上にあるとすれば、かいつぶりとは暗い部屋に鳥である手乗りかいつぶりが座っているイメージ。時間がジャンプしている（時が過ぎた）場合は、座っているのは僕自身だろう。世の中には扉があるが、それは**合わない鍵**で開くんだ。正しい鍵で開けている人は、問題なく生きているが、無理に間違った鍵で開けるとかいつぶりになる。

楯谷・誰にも合言葉を送っていない。

カタチ、論理がむちゃくちゃで、道も間違っているし、

奈原・形式的には合いかぎは渡されている。世間的にはルールは決まっている。かいつぶりが出るまでは、そのルールができるまでの経過を示している。社会契約説を仮想してルールの成立を説明する。

岡部・面接の質問がカギである。合言葉が求められている。

大藤・あんまりついていけないようになっていて。

楯谷・ちやらんぼらん人間、本人はまじめなつもり。かいつぶりもいい加減、指示もいいかげん。

適当さをこの小説は肯定している。雇われるかどうかは最後まで分からない。雇われたとしても将来はバラ色とは言えない。全体としてそのいい加減さを肯定している。それがかいつぶりという人を食っている話。そこが面白い。

奈原・経営者が時間に追われる。製品を納める納期、資金繰りのシビアさ。倒産の危機が常にある。「15分の遅刻」のリアリティ。自分の責任でないのに全部を自分の責任に背負わされるのがこの社会のルールであることの象徴。冤罪から原罪につながるような。

佐野・「現実の就職活動」として皆さん、これを読んだか。自分の魂の中に入って行くという読み。

楯谷・表面的な次元ともう一つ深い次元が二重になっている。

大藤・自分で鍵を開けよう、何とかしようとしている主人公は珍しい。ちやらんぼらんというが。カンガルー日和、状況の中でどう生きるか？に對し、どうしようもなさに欠ける。構造を変えようとしている。

楯谷・賛成。

奈原・ストイックなところがあると思う。いい加減なところがストイックに見えるという不思議なキャラクター。

コンクリート造りの狭い階段を下りると、その先には長い廊下がどこまでもまっすぐに続いていった。とても長い廊下だった。天井がいやに高いせいで、それは廊下というよりは干上がった排水溝みたくに見えた。そこには装飾と呼べるようなものは何ひとつなかった。きわめて即物的な廊下だった。ところどころにとりつけられた蛍光灯はたつぷりとほこりをかぶって黒ずみ、その光はいろんなひどい目にあわされた末にやっどこまで辿り着いたのだともいわんばかりに不均一で、疲弊してた。おまけに三本に一本は電球が切れてしまっている。自分の手のひらさえきちんとは見えない。あたりにはもの音ひとつない。運動靴のゴム底がコンクリートを踏む奇妙に平板な音だけが薄暗い廊下に響いていた。

二百メートルか三百メートル、いや一キロは歩いたかもしれない。僕は何も考えずにひたすら歩きつづけた。そこには距離もなければ時間もなかった。そのうちに前に進んでいるという感覚さえなくなってしまう。しかしまあ、とにかく前には進んでいたのだろう。僕は突然T字路のまんまに立っていた。

T字路？
僕は上着のポケットからくしゃくしゃになった葉書を取り出し、ゆっくり読み返してみた。

「廊下をまっすぐ進んで下さい。つきあたりにドアがあります」葉書にはそう書いてある。僕はつきあたりの壁を注意深く眺めまわしてみたが、そこにはドアの影も形もなかった。かつてドアがあったという痕跡もなければ、これから先ドアがとりつけられそうな見込みもない。それは実にあっさりとしたコンクリート158の壁で、コンクリートの壁が本来的に有している特質の他には何ひとつ見るべきものはなかった。形而上学的なドアも、象徴的なドアも、比喩的なドアも、まるで何もない。僕は手のひらで壁をずつと触ってみた。しかしそれはただのつるりとした壁だった。

これはたぶん何かの間違いにちがいない。
僕はコンクリートの壁にもたれかかって煙草を一本吸った。さて、これからどうすればいいのだろう。先に進んだものか。それともこのまま引き返したものか。

とはいっても、正直なところそれほど真剣に迷ったわけではない。本当のことを言えば、先に進むしか僕には道はなかったのだ。僕は貧乏な生活には十分うんざりしていた。月賦の支払いにも、別れた妻への離婚手当にも、狭いアパートにも、浴室のゴキブリにも、ラッシュ・アワーの地下鉄にも、そんな何もかもにうんざりしていた。そしてこれがやっつとみつけたうまい仕事だった。仕事は楽だし、給料は目玉が飛び出るほど良い。年に二回のポ

ーナス、夏の長期休暇。ドアがひとつみあたらなかったくらいで、はいそうですかと簡単にあきらめるわけにはいかないのだ。ドアがみつからないなら、みつかるまでどこまでも前進するのみだ。

僕はポケットから十円玉を出して軽く宙に放り上げ、手の甲で受けた。表、そして僕は右側の廊下を進んだ。

廊下は二度右に折れ、一度左に折れ、階段を十段下りて、また右に折れた。空気はコーヒー・ゼリーみたいに冷やりとして奇妙な密度があった。僕は給料のことを考え、エア・コンディショナーのきいた気持の良いオフィスのことを考えた。仕事があるというのはいいものだ。僕は歩調を速めて廊下を前に前にと歩いていった。

やがて行く手にドアが見えてきた。遠くから見るとそれは使い古しの切手のように見えたが、近づくに159つれて少しずつドアの体裁を帯び始め、ついには一枚のドアになった。

僕は一度咳払いしてからドアを軽くノックし、一歩下がって返事を待った。十五秒たっても返事はない。もう一度、今度は少し強くノックしてまた一歩下がる。返事はない。

僕のまわりで空気が少しづつ固まり始めた。

不安に駆られて三度めのノックをしようと足を踏みだしかけたところでドアが音もなく開いた。まるでどこから吹きこんできた風に押されて開いたといったふうなごく自然な開き方だったが、もちろんドアはごく自然に開いたわけではなかった。電灯のスイッチを入れるパチンという音が聞こえ、それから一人の男が僕の前に姿を現わした。

男は二十代の半ばというあたりで、身長は僕より五センチばかり低い。洗ったばかりの髪から水滴をしたたらせ、裸の体をえび茶色のバスローブに包んでいた。足は不自然なほど白く、そして細い。靴のサイズは22というあたりだろう。ペン習字の見本帳のようなのっぺりとした顔だちではあったけれど、口もとにはちよつと申し訳なさそうな微笑を浮かべていた。悪い人間ではないようだった。

「すみませんね、ちょうど風呂に入っていたものですから」

「風呂？」と言ってから僕は反射的に腕時計に目をやった。

「規則なんですよ。僕らは昼飯のあとには必ず風呂に入らなくちゃいけないんです」

「なるほど」と僕は言った。

「ところで御用は？」

僕は上着のポケットから例の葉書を取り出し、男に手渡した。男は濡らさぬように指先で葉書をつまみあげ、何回か読み返した。

「五分ほど遅刻しちゃったみたいなんだけど」と僕は言

い訳した。

160「ふむふむ」と彼は背いてから僕に葉書を返した。「ここで働くことになってるわけですね」

「そうです」と僕は言った。

「私は新規採用については何も聞いてないんだけど、とにかくまあ上の人に取り次いでみましょう。私の仕事はドアを開けて、上の人に取り次ぐってことだけですから」

「お願いします」

「ところで合言葉は？」

「合言葉？」

「合言葉のことは何も聞いてない？」

僕は呆然として首を振った。「聞いた覚えはありませんね」

「それは弱ったな。実はね、合言葉を知らない人間は誰も通しちゃいけないって上の人にきつく言われてるんですよ」

僕は合言葉がどうこうなんて話はまったく聞いていなかった。もう一度葉書をひっぱり出して見たが、やはり合言葉についての記述はなかった。

「きつと書き忘れたんだと思うな」と僕は言った。「ここに来るまでの道の案内もちょっと違っていたしね。とにかく上の人に取り次いでもらえませんか。そうすればわかると思うから。僕は採用されて今日からここで働くことになっているんですよ。上の人に訊いてももらえれば、そういう指示が出ていることがきつとわかると思うんですよ」

「いや、だから、そうするには合言葉が必要なんですよ」彼はそう言ってポケットの煙草を捜そうとしたが、あいにくバスローブにはポケットはなかった。僕は自分の煙草を一本さしだし、ライターで火を点けてやった。161

「あ、どうもすみませんね。それで、なにかその……、合言葉らしいものは思い出せませんか？」

無理な相談だった。聞いたことも見たこともない合言葉なんてそう急に思いつけるものじゃない。僕は首を振った。

「私だってこういう七面倒臭いことが好きなわけじゃないんだけどね、まあ上の人には上の人の考えがあるんでしょうね。わかるでしょ？ 上の人がどんな人か私は知らないし、会ったこともありませんよ。でもほら、そういう人って、いろんなことを思いつきでやるんですよ。個人的に取らないでくださいよね」

「ええそれはまあ」

「私の前にこの仕事やってたやつもさ、合言葉をど忘れしたっていう客を気の毒に思っ一人取り次いだだけでクビになっちゃったんですよ。即刻クビですよ。明日より入社するに及ばず、てなもんです。あなたもご存じなように、今どき良い仕事をみつけるのは大変ですものね」

僕は背いた。「ねえ、どうでしょう、少しだけヒントをもらえないかな？」

男はドアにもたれかかったまま、煙草の煙を宙に吐き出した。「それは規則で禁じられてるんですよ」

「ほんの少しでいいんだけど」

「でも、もし何かの拍子にばれちゃったら面倒なことになるしな」

「僕は黙ってる。あなたも黙ってる。わかりっこないじゃないですか」と僕は言った。僕だってこのことに関してはすごく真剣なのだ。簡単には引つ込めない。

男はしばらく迷ってから、小さい声で僕に耳打ちした。「いいですか、とても簡単なことばで、水に関係があります。手のひらに入るけれど、食べることはできない」

今度は僕が考えこむ番だった。

「最初のことばは？」

162「か」と彼は言った。

「貝がら」と僕は言ってみた。

「違う」と彼は言った。「あとふたつ」

「ふたつ？」

「あと二回間違えたらそれでおしまいね。悪いと思うけど、私だって危険を冒して規則を破ってやってるわけだから。いつまでもいつまでもあてっこしているわけにいかないんです」

「チャンスをもたらえたことについてはとても感謝してますよ」と僕は言った。「でももう少しだけヒントがもらえるとありがたいな。たとえば何文字のことばだとか……」

男はむずかしい顔をした。「そのぶんじゃ、いまにそっくり教えてくれて言いだすんじゃないんですか？」

「まさかそんな」と僕はとぼけた。「ただ文字の数を教えてくれればいいんです」

「五文字」と彼はあきらめたようにため息をついた。「まったく親父が言ったとおりだよ。一度他人の靴を磨いてやるとその次は靴紐まで結ばされる、てね」

「すみませんね」と僕は言った。

「とにかく五文字だよ」

「水に関係があって、手のひらに入るけれど食べることができない」

「そのとおり」

「そしてかで始まる五文字のことば」

「そうです」

僕はそれについてじつと考えた。

163「かいつぶり」と僕は言った。

「だっつかいつぶりは食べるでしょう」

「本当に？」

「たぶんね。美味くはないかもしれないけど」と彼は自信なげに言った。「それに手のひらには入らないよ」

「見たことある？」

「いや」と彼は言った。「私は鳥のことなんて何も知りま

せんよ。東京の町中で育ったんです。山手線の駅なら全部順番に言えます。でもかいつぶりなんて見たこともありません。それがどんな格好をした鳥かも知りませんよ」僕だってかいつぶりなんて生まれてこのかた一度も見ることがない。でも僕はかで始まる五文字の動物なんかかいつぶりしか思いつけなかつたのだ。その「かいつぶり」ということばがはつと反射的に僕の頭に浮かんだのだ。

「かいつぶり」と僕は言い張った。僕はきつぱりとそう言った。「手のりかいつぶりはおそろしく不味いから犬だつて食べない」

「ねえねえ、ちよつと待ってくださいよ」と彼は言った。

「あなたが何と言おうと、だいいち合言葉はかいつぶりじゃないんですよ。理屈はともかく違うものは違うんです」

「でもかいつぶりは水に関係があるし、手のひらに入るけど食べることはできない、それに五文字だ。ちゃんと合つてるでしょう」

「でもあなたの理屈は間違つてるよ」

「どこが？」

164 「だって合言葉はかいつぶりじゃないんだから」

「じゃあ何だい？」

彼は一瞬絶句した。「それは言えない」

「そんなもの存在しないからさ」と僕は能力の許す限り冷ややかに言い放った。「かいつぶり以外に水に関係があつて、手のひらに入るけど食べられない五文字のことばなんてひとつもないよ」

「でもあるんですよ、ちゃんと」と彼は泣きそうな声で言った。

「ないよ」

「ある」

「あるという証拠がない」と僕は言った。「それにかいつぶりは全ての条件をみたしているじゃないですか」

「でもその……手のりかいつぶりを食べるのが好きな犬がどこかにいるかもしれないでしょうが」

「じゃあそれはどこにいろんな犬なのか、具体的な例証を示してほしい」

「うーん」と彼は唸つた。

「僕は犬のことならなんでも知つてるけど、手のりかいつぶりが好きな犬なんて見たこともない」

「そんなに不味いんですか？」と彼は気弱そうな声で訊いた。

「それはもうおそろしく不味い」

「あなたは食べたことある？」

「ないよ。そんなに不味いものをどうして僕がわざわざ食べなくちゃいけないんだらう？」

「そりゃまあそうですね」

「とにかく上の人に取次いでくれませんか」と僕はき

つぱりとした声で言った。「かいつぶり」

165 「しかたないな」と彼は言った。そしてもう一度タオルで髪を拭いた。「一応取次いでみますよ。まあ無理だとは思いますがねえ」

「ありがとう。恩にきるよ」と僕は言った。

「でも手のりかいつぶりなんて本当にいますか？」

「きつとどこかにいるさ」と僕は言った。でもどうしてまたかいつぶりなんてものを急に思いついたのだろうか？

手のりかいつぶりはビロードの布で眼鏡のレンズを

拭き、もう一度ため息をついた。右下の奥歯がしくしくと痛んだ。また歯医者か、と彼は思う。もううんざりだ。

世界はろくでもないことでみちている。歯医者、確定申告、車の月賦、エア・コンディショナーの故障……。彼は皮ばりのアームチェアの背もたれに頭をもたせかけ、

目を閉じて、死について思いめぐらしてみた。死は海の底のように静かで、五月の薔薇のように甘美だった。か

いつぶりはこのところよく死について考えた。自分が死んで永遠に眠っている光景を頭の中に描くのだ。

手のりかいつぶりここに眠る。墓石にはそう刻んであつた。

その時インタフォンのブザーが鳴った。

「なんだ？」と手のりかいつぶりは機械に向けて不機嫌な声で怒鳴つた。

「お客です」と門番の声がした。「今日からここで仕事を

するんだそうです。合言葉も言いました」
手のりかいつぶりは眉をしかめて腕時計を眺めた。
「十五分の遅刻」

5349 字

【講談社文庫版】

かいつぶり

村上春樹

175

コンクリート造りの狭い階段を下りると、その先には長い廊下がまっすぐに続いていた。天井がいやに高いせいか、廊下は干上がった排水溝みたいに見えた。ところどころにとりつけられた蛍光灯はたつぷりとほこりをか

ぶつて黒ずみ、その光はこまかい網でもくぐり抜けてきたように不均一だった。おまけに三本に一本は電球が切れてしまっている。自分の手のひらを眺めるのも一苦労という有様だ。あたりにはもの音ひとつない。運動靴のゴム底がコンクリートを踏む奇妙に平板な音だけが薄暗い廊下に響いていた。

二百メートルか三百メートル、いや一キロは歩いたかもしれない。僕は何も考えずにひたすら歩きつづけた。そこには距離もなければ時間もなかった。そのうちに前に進んでいるという感覚さえなくなってしまう。しかしまあ、とにかく前には進んでいたのだろう。僕は突然「字路のまんなか立っていた。」

「字路？」

僕は上着のポケットからくしゃくしゃになった葉書を取り出し、ゆっくり読み返してみた。

176

「廊下をまっすぐ進んで下さい。つきあたりにドアがあります」葉書にはそう書いてある。僕はつきあたりの壁を注意深く眺めまわしてみたが、そこにはドアの影も形もなかった。かつてドアがあったという痕跡もなければ、これから先ドアがとりつけられそうな見込みもない。それは実にあっさりとしたコンクリートの壁で、コンクリートの壁が本来的に有している特質の他には何ひとつ見るべきものはなかった。形而上学的なドアも、象徴的なドアも、比喩的なドアも、まるで何もない。

やれやれ。

僕はコンクリートの壁にもたれかかって煙草を一本吸った。さて、これからどうすればいいのだろう。先に進んだものか。それともこのまま引き返したものか。

とはいっても、正直なところそれほど真剣に迷ったわけではない。本当のことを言えば、先に進むしか僕には道はなかったのだ。僕は貧乏な生活には十分うんざりしていた。月賦の支払いにも、別れた妻への離婚手当にも、狭いアパートにも、浴室のゴキブリにも、ラッシュ・アワの地下鉄にも、そんな何もかもにうんざりしていた。そしてこれがやつとみつけたうまい仕事だった。仕事は楽だし、給料は目玉が飛び出るほど良い。年に二回のボーナス、夏の長177期休暇。ドアのひとつ、曲がり角のひとつくらいであきらめる手はない。

僕は靴の底で煙草を踏み消してから十円玉を宙に放り上げ、手の甲で受けた。表、そして僕は右側の廊下を進んだ。

廊下は二度右に折れ、一度左に折れ、階段を十段下りて、また右に折れた。空気はコーヒー・ゼリーみたいひやりとしていた。僕は金のことを考え、エア・コンデিশヨナーのきいた気持の良いオフィスのことを考え、素敵な女の子のことを考えながら歩き続けた。一枚のドアに辿りつきさえすればそんな何もかもを手にすること

ができるのだ。

やがて行く手にドアが見えてきた。遠くから見るとそれは使い古しの切手のように見えたが、近づくにつれて少しづつドアの体裁を帯び始め、ついには一枚のドアになった。

ドア、なんとという素晴らしい響きだ。

僕は一度咳払いしてからドアを軽くノックし、一步下がって返事を待った。十五秒たっても返事はない。もう一度、今度は少し強くノックしてまた一步下がる。返事はない。

僕のまわりで空気が少しづつ固まり始めた。

不安に駆られて三度めのノックをしようとする足踏みだしかけたところでドア178が音もなく開いた。まるでどこから吹きこんできた風に押されて開いたといったふうなごく自然な開き方だったが、もちろんドアはごく自然に開いたわけではなかった。電灯のスイッチを入れるパチンという音が聞こえ、それから一人の男が僕の前に姿を現わした。

男は二十代の半ばというあたりで、身長は僕より五センチばかり低い。洗ったばかりの髪から水滴をしたたらせ、裸の体をえび茶色のバスローブに包んでいた。足は不自然なほど白く、そして細い。靴のサイズは22というあたりだろう。ペン習字の見本帳のようなのっぺりとした顔だちではあったけれど、口もとには人の良さそうな微笑を浮かべていた。

「ごめんよ、風呂に入っていたものだから」

「風呂？」と言ってから僕は反射的に腕時計に目をやった。

「規則なんだ。昼飯のあとには必ず風呂に入らなくちゃいけない」

「なるほど」と僕は言った。

「ところで御用は？」

僕は上着のポケットから例の葉書を取り出し、男に手渡した。男は濡らさぬように指先で葉書をつまみあげ、何回か読み返した。

「五分ほど遅刻しちゃったみたいだけど」と僕は言い訳した。

179「ふむふむ」と彼は肯いてから僕に葉書を返した。

「ここで働くことになってるんだね」

「そう」と僕は言った。

「俺は何も聞いてないんだけど、とにかくまあ上の人に取り次いでみるよ」

「ありがとう」

「ところで合言葉は？」

「合言葉？」

「合言葉のことは何も聞いてない？」

僕は呆然として首を振った。「何も……」

「それは弱ったな。合言葉がないと誰も通しちゃういな

いって上の人にきつく言われてるんだよね」

僕はもう一度葉書をひっぱり出して見たが、やはり合言葉についての記述はなかった。

「きつと書き忘れたんだね」と僕は言った。

「とにかく上の人に取り次いでもらえないかな」

「だから、そのためには合言葉がいるんだよ」彼はそう言ってポケットの煙草を捜そうとしたが、あいにくバスローブにはポケットはなかった。僕は自分の180煙草を一本差しだし、ライターで火を点けてやった。

「悪いな……、それで、何かその……、合言葉らしいものは思い出せない？」

無理な相談だった。合言葉なんて思いつきもしない。僕は首を振った。

「俺もこういうしち面倒臭いことが好きなわけじゃないんだけどさ、まあ上の人には上の人の考えがあるんだろうしね。わかるだろ？」

「わかるよ」

「俺の前にこの仕事やってたやつもさ、合言葉を忘れてたっていう客を一人取り次いだけでクビになっちゃったんだよ。今どき良い仕事は少ないからね」

僕は肯いた。「ねえ、どうだろう、少しだけヒントをもらえないかな？」

男はドアにもたれかかったまま、煙草の煙を宙に吐き出した。「それは禁じられてるんだ」

「ほんの少しでいいんだよ」

「でも、どこかに隠しマイクがあるかもしれない」

「そうかな」

男はしばらく迷ってから、小さい声で僕に耳打ちした。「いいかい、とても簡単なことばで、水に関係があるんだ。手のひらに入るけれど、食べることはできない」

181 今度は僕が考えこむ番だった。

「最初のことばは？」

「か」と彼は言った。

「貝がら」と僕は言ってみた。

「違う」と彼は言った。「あとふたつ」

「ふたつ？」

「あと二回間違えたらそれでおしまいだよ。悪いとは思うけど、俺だって危険を冒して規則を破ってやってるわけだからね」

「感謝してるよ」と僕は言った。「でももう少しヒントがもらえるとありがたいな。たとえば何文字のことばだとか……」

「いまにそっくり教えてくれって言いだすんじゃないのか？」

「まさか」と僕はとぼけた。「ただ文字の数を教えてくれるだけでいいんだよ」

「五文字」と彼はあきらめられたように言った。「親父が言ったとおりだよ」

「親父？」

「親父がよく言ってたよ。他人の靴を磨いてやるとその次は靴紐を結ばされる、てさ」

「なるほど」と僕は言った。

182 「とにかく五文字だ」

「水に関係があつて、手のひらに入るけれど食べることはできない」

「そのとおり」

「かいつぶり」と僕は言った。

「かいつぶりは食べるよ」

「本当に？」

「たぶんね。美味くはないかもしれないけど」と彼は自信なげに言った。「それに手のひらには入らないよ」

「見たことある？」

「いや」と彼は言った。

「かいつぶり」と僕は言い張った。「手のりかいつぶりはとても不味いから犬も食べない」

「まてよ」と彼は言った。「だいいち合言葉はかいつぶりじゃないんだ」

「でも水に関係があるし、手のひらに入るけど食べることはできない、それに五文字だ」

「あなたの理屈は間違ってる」

「どこが？」

184 「だって合言葉はかいつぶりじゃないんだから」

「じゃあ何だい？」

彼は一瞬絶句した。「それは言えない」

「存在しないからさ」と僕は能力の許す限り冷ややかに言い放った。「かいつぶり以外に水に関係があつて、手のひらに入るけど食べられない五文字のことばなんてひとつもないよ」

「でもあるんだよ」と彼は泣きそうな声で言った。

「ないよ」

「ある」

「あるという証拠がない」と僕は言った。「それにかいつぶりは全ての条件をみたしているじゃないか」

「でもその……手のりかいつぶりが好きな犬がどこかにいるかもしれない」

「どこにいる？ そしてどんな犬だい？」

「うーん」と彼は唸った。

「僕は犬のことならなんでも知ってるけど、手のりかいつぶりが好きな犬なんて見たこともない」

「そんなに不味いのかい？」

185 「おそろしく不味い」

「あんたは食べたことある？」

「ないよ。そんなに不味いものをどうして食べなくちゃいけないんだ？」

「そりゃまあそうだな」

「とにかく上の人に取り次いでくれないかな」と僕はき

つぱりと言った。「かいつぶり」

「しかたないな」と彼は言った。「一応取り次いでみるよ。無理だとは思うけどさ」

「ありがとう。恩にきるよ」と僕は言った。

「でも手のりかいつぶりなんて本当にいるのかい？」

「うるさ」

手のりかいつぶりはビロードの布で眼鏡のレンズを拭き、ため息をついた。右下の奥歯がしくしくと痛んだ。歯医者か、と彼は思う。もううんざりだ。歯医者、確定申告、車の月賦、エア・コンディショナーの故障……。彼は皮ばりのアームチェアの背もたれに頭をもたせかけ死について思いめぐらしてみた。死は海の底のように静かだった。

186 手のりかいつぶりここに眠る。

その時インタフォンのブザーが鳴った。

「なんだ？」と手のりかいつぶりは機械にむけてどなった。

「お客です」と門番の声がした。

手のりかいつぶりは腕時計を眺めた。「十五分の遅刻」

4106字

コンクリート造りの狭い階段を下りると、その先には長い廊下がどこまでもまっすぐに続いていった。とても長い廊下だった。天井がいやに高いせいかで、それは廊下というよりは干上がった排水溝みたいに見えた。そこには装飾と呼べるようなものは何ひとつなかった。きわめて即物的な廊下だった。ところどころにとりつけられた蛍光灯はたつぷりとほこりをかぶって黒ずみ、その光はままかい網でもくぐり抜けてきたまよひいろんなひどい目にあわされた末にやつとここまで辿り着いたのだともいわんばかりに不均一だやうで、疲弊してた。おまけに三本に一本は電球が切れてしまっている。自分の手のひらを眺めるのも十苦勞といひ有様ださきちんとは見えない。あたりにはもの音ひとつない。運動靴のゴム底がコンクリートを踏む奇妙に平板な音だけが薄暗い廊下に響いていた。

二百メートルか三百メートル、いや一キロは歩いたかもしれない。僕は何も考えずにひたすら歩きつづけた。そこには距離もなければ時間もなかった。そのうちに前に進んでいるという感覚さえなくなってしまう。しかしまあ、とにかく前には進んでいたのだろう。僕は突然T字路のまんなか立っていた。

T字路？

僕は上着のポケットからくしゃくしゃになった葉書を取り出し、ゆっくり読み返してみた。

「廊下をまっすぐ進んで下さい。つきあたりにはドアがありません」**下**葉書にはそう書いてある。僕はつきあたりの壁を注意深く眺めまわしてみたが、そこにはドアの影も形もなかった。かつてドアがあったという痕跡もなければ、これから先ドアがとりつけられそうな見込みもない。それは実にあっさりとしたコンクリート**158**の壁で、コンクリートの壁が本来的に有している特質の他には何ひとつ見るべきものはなかった。形而上学的なドアも、象徴的なドアも、比喩的なドアも、まるで何もない。僕は手のひらで壁をずっと触ってみた。しかしそれはただのつるりとした壁だった。

これはたぶん何かの間違いにちがいない。

ちれちれ。

僕はコンクリートの壁にもたれかかって煙草を一本吸った。さて、これからどうすればいいのだろう。先に進んだものか。それともこのまま引き返したものか。

とはいっても、正直なところそれほど真剣に迷ったわけではない。本当のことを言えば、先に進むしか僕には道はなかったのだ。僕は貧乏な生活には十分うんざりしていた。月賦の支払いにも、別れた妻への離婚手当にも、狭いアパートにも、浴室のゴキブリにも、ラッシュユ・ア

ワアの地下鉄にも、そんな何もかもにうんざりしていた。そしてこれがやつとみつけたうまい仕事だった。仕事は楽だし、給料は目玉が飛び出るほど良い。年に二回のボーナス、夏の長期休暇。ドアわがひとつみあたらんかったくらいで、曲がり角のひとくちみぢいはいそうですかと簡単にあきらめるわけには手は無いかないのだ。ドアがみつからないなら、みつかるまでどこまでも前進するのみだ。

僕は靴の底で煙草を踏み消して下からポケットから十円玉を出して軽く宙に放り上げ、手の甲で受けた。表、そして僕は右側の廊下を進んだ。

廊下は二度右に折れ、一度左に折れ、階段を十段下りて、また右に折れた。空気はコーヒー・ゼリーみたいに冷やりとしていた奇妙な密度があった。僕は給料のことを考え、エア・コンディショナーのきいた気持の良いオフィスのことを考えた。素敵**本女の子のことを考えながら歩き続けた**。仕事があるというのはいいものだ。十枚の**ドアに辿りつきさえすればそんな何もかもを手にする**ことができるのだ。僕は歩調を速めて廊下を前に前にと歩いていった。

やがて行く手にドアが見えてきた。遠くから見るとそれは使い古しの切手のように見えたが、近づくに**159**つれて少しずつドアの体裁を帯び始め、ついには一枚のドアになった。

ドア、なんとこれも素晴らしい響きだ。

僕は一度咳払いしてからドアを軽くノックし、一歩下がって返事を待った。十五秒たっても返事はない。もう一度、今度は少し強くノックしてまた一歩下がる。返事はない。

僕のまわりで空気が少しづつ固まり始めた。

不安に駆られて三度めのノックをしようとする足踏みだしかけたところでドアが音もなく開いた。まるでどこから吹きこんできた風に押されて開いたといったふうなごく自然な開き方だったが、もちろんドアはごく自然に開いたわけではなかった。電灯のスイッチを入れるパチンという音が聞こえ、それから一人の男が僕の前に姿を現わした。

男は二十代の半ばというあたりで、身長は僕より五センチばかり低い。洗ったばかりの髪から水滴をしたたらせ、裸の体をえび茶色のバスローブに包んでいた。足は不自然なほど白く、そして細い。靴のサイズは22というあたりだろう。ペン習字の見本帳のようなのっぺりとした顔だちではあったけれど、口もとには人の良まぢよと**申し訳なきような微笑を浮かべていた。悪い人間ではないようだった。**

「**ぢめんよすみませんね、ちょうど風呂に入っていたもの**ですから」

「風呂？」と言ってから僕は反射的に腕時計に目をやっ

た。

「規則なんだからですよ。僕らは昼飯のあとには必ず風呂に入らなくちゃいけないんです」

「なるほど」と僕は言った。

「ところで御用は？」

僕は上着のポケットから例の葉書を取り出し、男に手渡した。男は濡らさぬように指先で葉書をつまみあげ、何回か読み返した。

「五分ほど遅刻しちゃったみたいなんだけど」と僕は言い訳した。

160 「ふむふむ」と彼は肯いてから僕に葉書を返した。「ここで働くことになってるんだねわけですね」

「そうです」と僕は言った。

「俺は新規採用については何も聞いてないんだけど、とにかくまあ上の人に取り次いでみよましよう。私の仕事はドアを開けて、上の人に取り次ぐっていうことだけですから」

「ありがともお願いします」

「ところで合言葉は？」

「合言葉のことは何も聞いてない？」

僕は呆然として首を振った。「何も……聞いた覚えはありませんね」

「それは弱ったな。実はね、合言葉がないと知らない人間は誰も通しちゃいけないって上の人にきつく言われているんだよねですよ」

僕は合言葉がどうこうなんて話はまったく聞いていなかった。もう一度葉書をひっぱり出して見たが、やはり合言葉についての記述はなかった。

「きつと書き忘れたんだねだと思ふな」と僕は言った。「ここに来るまでの道の案内もちょっと違っていたしね」とにかく上の人に取り次いでもらえないかなませんか。

そうすればわかると思うから。僕は採用されて今日からここで働くことになっているんですよ。上の人に訊いてもらえれば、そういう指示が出ていることがきつとわかると思ふんですよ」

「いや、だから、そのためそうするには合言葉がわんだけ必要なんですよ」彼はそう言ってポケットの煙草を捜そうとしたが、あいにくバスローブにはポケットはなかった。僕は自分の煙草を一本さしだし、ライターで火を点けてやった。161

「悪いな……、あ、どうもすみませんね。それで、なにこそ……、合言葉らしいものは思い出せませんか？」

無理な相談だった。聞いたことも見たこともない合言葉なんてそう急に思いつきもしけるものじゃない。僕は首を振った。

「俺も私だってこういう七面倒臭いことが好きなのわけじゃないんだけどまね、まあ上の人には上の人の考えがあるんだわもしでしょうね。わかるわあでしょ？ 上の人がどんな人か私は知らないし、会ったこともありませんが。でもほら、そういう人って、いろんなことを思いつきでやるんですよ。個人的に取らないでくださいよね」

「わかまよええそれはまあ」

「俺私の前にこの仕事やってたやつもさ、合言葉をど忘れしたっていう客を気の毒に思っって一人取り次いだだけでクビになっちゃったんだですよ。即刻クビですよ。明日より入社するに及ばず、てなもんです。あなたもご存じなように、今どき良い仕事をつつけるのは少ないわあ大変ですよのね」

僕は肯いた。「ねえ、どうだわあでしょう、少しだけヒントをもらえないかな？」

男はドアにもたれかかったまま、煙草の煙を宙に吐き出した。「それは規則で禁じられてるんだですよ」

「ほんの少しでいいんだよだけど」

「でも、どまかに隠しマイクがあるかもしれなもし何かの拍子にばれちゃったら面倒なことになるしな」

「そりか本僕は黙ってる。あなたも黙ってる。わかりっこないじゃないですか」と僕は言った。僕だっってこのことに関してはすごく真剣なのだ。簡単には引つ込めない。男はしばらく迷ってから、小さい声で僕に耳打ちした。

「いいかいですか、とても簡単なことばで、水に関係があるんだります。手のひらに入るけれど、食べることはできない」

今度は僕が考えこむ番だった。

162 「か」と彼は言った。

「貝がら」と僕は言ってみた。

「違う」と彼は言った。「あとふたつ」

「ふたつ？」

「あと二回間違えたらそれでおしまいだよ。悪いと俵思うけど、俺私だっって危険を冒して規則を破ってやってるわけだからね。いつまでもいつまでもあてっこしているわけにいかないんですよ」

「チャンスをもたらえたことについてはとても感謝してあげますよ」と僕は言った。「でももう少しだけヒントがもらえるとありがたいな。たとえば何文字のことばだとか……」

男はむずかしい顔をした。「そのぶんじゃ、いまにそっくり教えてくれて言いだすんじゃないゆんですか？」

「まさかそんな」と僕はとぼけた。「ただ文字の数を教えてくれればだいたいいいんだよればいいんです」

「五文字」と彼はあきらめたように言わため息をついた。「まったく親父が言ったとおりだよ。一度……」

「親父……」

「親父がよく言わてたよ。他人の靴を磨いてやるとその次は靴紐をまで結ばされる、てまね」

「**本もほぐすみませんね**」と僕は言った。

「とにかく五文字だ」

「水に関係があつて、手のひらに入るけれど食べることができない」

「そのとおり」

「**そしてかで始まる五文字のことは**」

「**そうです**」

僕はそれについてじつと考えた。

163 「**かいつぶり**」と僕は言った。

「**だってかいつぶりは食べるよでしょう**」

「**本当に？**」

「たぶんね。美味くはないかもしれないけど」と彼は自信なげに言った。「それに手のひらには入らないよ」

「見たことある？」

「いや」と彼は言った。「私は鳥のことなんて何も知りませんよ。東京の町中で育ったんです。山手線の駅なら全部順番に言えます。でもかいつぶりなんて見たこともありません。それがどんな格好をした鳥かも知りませんよ」僕だってかいつぶりなんて生まれてこのかた一度も見ることがない。でも僕はかで始まる五文字の動物なんかいつぶりしか思いつけなかったのだ。その「かいつぶり」ということばがはつと反射的に僕の頭に浮かんだのだ。

「かいつぶり」と僕は言い張った。僕はきっぱりとそう言った。「手のりかいつぶりは**とすもおそろしく不味いから犬もだつて食べない**」

「**まだよねえねえ、ちよつと待ってくださいよ**」と彼は言った。「あなたが何と言おうと、だいいち合言葉はかいつぶりじゃないんですよ。理屈はともかく違うものは違うんです」

「でもかいつぶりは水に関係があるし、手のひらに入るけど食べることはできない、それに五文字だ。**ちゃんと合ってるでしょう**」

「**でもあなたの理屈は間違ってるよ**」

「**どこが？**」

164 「**だって合言葉はかいつぶりじゃないんだから**」

「**じゃあ何だい？**」

彼は一瞬絶句した。「それは言えない」

「**そんなもの存在しないからさ**」と僕は能力の許す限り冷ややかに言い放った。「かいつぶり以外に水に関係があつて、手のひらに入るけど食べられない五文字のことはなんてひとつもないよ」

「**でもあるんだですよ、ちゃんと**」と彼は泣きそうな声で言った。

「**ないよ**」

「**ある**」

「あるという証拠がない」と僕は言った。「それにかいつぶりは全ての条件をみたしているじゃないですか」

「でもその……手のりかいつぶりを**食べるのが好きな犬**がどこかにいるかもしれないでしょうが」

「**じゃあそれはどこにいるの？**そしてどんな犬だいやなのか、**具体的な例証を示してほしい**」

「うーん」と彼は唸った。

「僕は犬のことならなんでも知ってるけど、手のりかいつぶりが好きな犬なんて見たこともない」

「**そんなに不味いのかいんですか？**」と彼は気弱そうな声で訊いた。

「それはもうおそろしく不味い」

「**あなたは食べたことある？**」

「ないよ。そんなに不味いものをどうして僕がわざわざ食べなくちゃいけないんだろう？」

「そりゃまあ**そうだなですね**」

「とにかく上の人に取り次いでくれないかなませんか」と僕はきっぱりとした声で言った。「かいつぶり」

165 「**しかたないな**」と彼は言った。そしてもう一度タオルで髪を拭いた。「一応取り次いでみますよ。まあ無理だとは思いますが、**お願いしますけどね**」

「**ありがとう。恩にきるよ**」と僕は言った。

「でも手のりかいつぶりなんて本当にいるのかいんですか？」

「**きつとどこかにいるさ**」と僕は言った。でもどうしてまたかいつぶりなんてものを急に思いついたのだろうか？

手のりかいつぶりはビロードの布で眼鏡のレンズを拭き、もう一度ため息をついた。右下の奥歯がしくしくと痛んだ。また歯医者か、と彼は思う。もううんざりだ。世界はろくでもないことのみちている。歯医者、確定申告、車の月賦、エア・コンディショナーの故障……。彼は皮ばりのアームチェアの背もたれに頭をもたせかけ、目を閉じて、死について思いめぐらしてみた。死は海の底のように静かで、五月の薔薇のように甘美だった。かいつぶりはこのところよく死について考えた。自分が死んで永遠に眠っている光景を頭の中に描くのだ。手のりかいつぶりここに眠る。墓石にはそう刻んであった。

その時インタフォンのブザーが鳴った。

「**なんだ？**」と手のりかいつぶりは機械に向けて不機嫌な声で怒鳴った。

「**お客です**」と門番の声がした。「**今日からここで仕事を**するんだそうです。合言葉も言いました」

手のりかいつぶりは眉をしかめて腕時計を眺めた。「**十五分の遅刻**」